特定非営利活動法人
AMDA社会開発機構

2024
年次報告書

目次

巻頭挨拶	p1
2024年度の取り組み	p2
ミャンマー事業	p3～4
ネパール事業	p5～6
ホンジュラス事業	p7～8
マダガスカル事業	p9～10
ザンビア事業	p11
シエラレオネ事業	p12
国際理解教育	p13～14
企業・団体との連携	p15～16
事業一覧	p17
2024年度会計報告	p18

表紙写真：マダガスカル
人形劇で衛生管理の大切さを学び、
笑顔を見せる子どもたち

巻頭に寄せて

AMDA社会開発機構
理事長　鈴木　俊介

新たな年度を迎えるにあたり、役職員一同、そして活動国の関係者、特に受益者の方々に代わり、旧年度中に頂戴したご支援、そして多方面からの応援、ご協力に、心から御礼申し上げます。

2020年度以降、COVID-19の世界的蔓延によって極端な渡航制限が敷かれたため、優先度、喫緊度の低い渡航は控えるよう心掛けてきました。しかし令和6年度（2024年度）中、そしてこの5月と、当団体の職員が駐在する活動国をすべて訪問して事業成果を確認することができました。具体的にはホンジュラス、マダガスカル、ネパールです。そしてインドネシア北スマトラ州沖のニアス島を20年ぶりに訪問することもできました。2005年3月に発生したスマトラ島沖地震により、多数の家屋が崩壊し、多くの命が失われました。当時AMDAの職員だった私はその後、被災地に入り、日本政府の資金を得たUNHCRやWFPと連携し、強い揺れにより一度海面下に沈んだ同島東側の村々の復興住宅建設に取り組みました。当時、5年、長くて10年を想定して建設された「仮設」住宅は、20年経過した今も、多くの家族の生計を支えています。思い思いの塗装などがなされやや顔つきは変わりましたが、家々が当時と同じ場所に並び立つ光景を見た時の衝撃と歓喜は忘れないでしょう。

当法人の存在事由の一つであるコミュニティ開発の推進は、様々な理由により貧困度が高く、行政サービスが届き難い地域におけるプロジェクトを実践することで成就します。現場の開発ニーズに沿った活動を実施することはもちろん、自立発展性の観点から、関係者の能力や受益者のオーナーシップにも可能な限り配慮しなければなりません。事業Aを実施したいがハードルが高い、ならばプランBはどうだろうか、と考えを巡らせ、柔軟に取り組むことが大切です。

手前みそになり恐縮ですが、全ての活動国への訪問を終え、今胸を張って、AMDA社会開発機構は、頂戴した資金を効果的、効率的に活用し、素晴らしい成果を生み出していることをご報告申し上げます。

2025年度の活動にさらなるご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2024年度の取り組み

アムダマインズは2024年度、職員の派遣先も含め、アジア・アフリカ・中南米の8か国で多岐にわたる開発支援事業に携わりました。

アジアでは、ミャンマーとネパールに現地事務所を置き、母子保健と生計の向上を目指す活動を継続しました。ミャンマーでは、少数民族が多く住む山岳地帯における母子保健事業と、中央乾燥地でのマイクロファイナンスを通じた生計向上事業に取り組みました。ネパールでは、極西部のへき地集落において安全な妊娠・出産を支える事業を継続したほか、農業による収入向上を推進する事業の取り組みが本格化しました。また、インドネシアでは、農業分野のJICA技術協力プロジェクトと、同草の根技術協力事業への職員派遣を継続しました。

アフリカでは、駐在員を派遣しているマダガスカルを中心に4か国で活動しました。マダガスカルでは、子どもの栄養改善事業が完了し、年度末には新たに野菜の収穫量を増やすための事業を開始したほか、養鶏支援や学校の教育環境改善にも取り組みました。ザンビアでは、思春期の子どもたちとコミュニティセンターへの支援を、また、シエラレオネでは同国唯一の小児病院の運営を支える活動を継続しました。また、エジプトではJICA技術協力プロジェクトへの職員派遣を継続しました。

中米のホンジュラスでは、山間部に点在する保健医療施設の機能を強化し、十分な保健医療サービスを受けられない母子を支援する事業を継続。乳がん・子宮頸がん検診促進事業には規模を拡大して取り組みました。また、環境保全と栄養改善を目的とする家庭菜園の推進、JICA技術協力プロジェクトへの参画も継続しました。

日本国内では、企業や各種教育機関等との連携の拡大、学校や団体等での講演、イベントへの出展・参加に努め、多くの方にアムダマインズの取り組みや各国の状況を伝えることができました。

以上の活動は、会員、マンスリーサポーター、企業、団体、個人の皆様からのご支援と、日本国外務省や独立行政法人国際協力機構（JICA）からの資金協力により実施しました。

ネパール

ミャンマー

日本

ホンジュラス

スタッフ派遣
エジプト、インドネシア

JICA技術協力プロジェクト
JICA草の根技術協力事業への職員派遣

シエラレオネ

ザンビア

マダガスカル

■持続可能な開発目標とは
（SDGs：Sustainable Development Goals）

SDGs は持続可能な世界を目指す国際目標です。2030 年までに全ての国が取り組むべきものとして、17 のゴール・169 のターゲットから構成されています。SDGs とアムダマインズの活動との関連性を図に示しました。

ミャンマー

面積：68万㎢（日本の約1.8倍）
人口：5,413万人(2023年/世界銀行調べ)
公用語：ミャンマー語
1人あたりのGNI：1,230米ドル
(2023年/世界銀行調べ)
5歳未満児死亡率：40人
（出生1,000人あたり、2022年/WHO調べ）
妊産婦死亡率：185人
（出生10万人あたり、2023年/WHO調べ）

2011年の民主化以降、「アジア最後のフロンティア」として注目されたミャンマーですが、2021年2月の政変と非常事態宣言発令により、社会全体が混乱に陥り、現在も不安定な状況が続いています。経済の停滞や物価高騰により、多くの人々が困難な暮らしを強いられ、とりわけ地方部では医療や教育、収入の機会へのアクセスが大きく制限されています。人びとは自らの力で逆境を跳ね除け、生活を立て直すことを余儀なくされており、きめ細やかな支援が求められています。

暮らしを支えるマイクロファイナンス
マンダレー地域メティラ郡

ミャンマー中部にあるメティラ郡は、雨が少なく土地もやせている厳しい自然環境の中で、多くの住民が農業や畜産、小規模な商いなどで暮らしを支えています。特に貧困層の女性たちは、銀行などの金融サービスを利用することが難しく、商売を始めたり、生活を立て直したりするのに必要な資金を得る機会が限られてきました。こうした背景のもと、私たちは、無担保で少額の融資を提供するマイクロファイナンスを通じて、女性たちの経済的な自立と家族の生活向上

融資で販売用の花の栽培に挑戦

スタッフの声

タン・タイさん（マイクロファイナンス オペレーション・マネージャー）

1998年から現在まで、AMDAグループは私の住むメティラ郡で多くの開発プロジェクトを実施してきました。現在も続いている「生計向上プロジェクト」もその一つで、マイクロファイナンスを活用して、地域の暮らしを支えています。私を含めた、現在の運営スタッフのほとんどは、2002年からこのプロジェクトに関わり続けています。

ご存知のように、新型コロナウイルス感染症や不安定な社会情勢、そして自然災害などは、活動にも大きな影響を及ぼしてきました。私たちは、こうした様々な困難に直面しながらも、活動の目的である「貧困層女性の自立と生計向上」を忘れることなく、ミャンマーのコミュニティーのために存続し、粘り強く活動に取り組んでいます。

より良い未来に向けて、今後も着実に歩み続けていきたいと思います。

を支援しています。現在、メティラ郡内65の村で、約2,400人のメンバーに対し、融資・貯蓄・金融教育を組み合わせた包括的な支援を提供しています。

2024年度は、不安定な経済状況と物価の上昇が続いたにもかかわらず、多くの女性たちは、新たな収入源を見つけようと前向きに挑戦を続けました。例えば、美容院の開業やバイクタクシーの運転、家畜の餌の販売など、地域の身近なニーズを捉えた多様な取り組みが生まれました。一人ひとりの状況に応じた融資や返済の計画を立てることで、無理なく事業に取り組むことができ、収入の増加や暮らしの安定につながっています。この取り組みは、単なる「お金の貸し借り」ではありません。「家族の暮らしを少しでも良くしたい」という、女性たちの強い想いと行動こそが、この事業を動かす原動力となっています。

本事業は、国際ロータリー第2780地区の多くのクラブをはじめとする皆様からのご寄付と、外務省「日本 NGO 連携無償資金協力」の資金を原資に実施しています。

母子の健康を守る持続可能な地域づくり
シャン州マイエー郡

ミャンマー北東部に位置するシャン州マイエー郡は、標高800～1,400メートルの丘陵地帯に広がり、多くの少数民族が暮らしています。道路や通信インフラが整っていない村も多く、保健医療へのアクセスが限られています。そのため、妊娠や出産、育児に関する正しい知識が十分に行き届かず、母子の健康が危険にさらされることも少なくありません。こうした課題を受け、私たちは2022年度から、母子保健や衛生環境の改善に取り組んできました。活動の柱は、住民一人ひとりが自ら学び、考え、行動する力を育てることです。

2024年度は、これまでの取り組みを地域に根付かせ、住民主体で継続できる仕組みづくりに力を入れました。地域で起きている変化や新たに浮かび上がった課題を把握した上で、住民参加型のワークショップを開催し、前年度に策定した行動計画の進捗を確認・見直しました。これにより、「自分たちの手で地域をより良く変えていく」という意識が広がり始めています。

また、地域の健康を支える人材として、約140人の保健ボランティアを育成し、妊娠・出産・産後ケア、水と衛生、栄養のテーマで研修を行いました。保健ボランティアは、学んだ内容を地域や家庭で共有し、健康的な生活習慣の普及に貢献しています。さらに、家庭訪問を通じた食生活指導や、離乳食の調理教室も実施し、家族全体の健康づくりへとつなげています。

衛生環境の向上にも力を入れました。設置したハエ防止型トイレや家庭用の水ろ過器は、住民自身によって適切に維持管理されています。さらに、衛生研修に約800人の住民が参加し、正しい手洗いや食品衛生、下痢への適切な対応など、日常生活に直結する知識を学びました。こうした活動を通じて、地域全体に衛生に関する知識と実践が広がり、感染症予防への意識が着実に根付いてきています。

本事業は、外務省「日本NGO連携無償資金協力」、ならびに皆さまからのご支援により支えられています。

調理教室で離乳食づくりを学ぶ母親たち

衛生研修で正しい手洗いの方法を学ぶ

受益者の声

ナン・サン・ルーさん（マイエー郡 保健研修の受講者）

私の住むパーキー村には保健センターがなく、具合が悪くなると村に伝わる伝統的な治療を受けるか、自己流の薬物療法を行うしかありませんでした。

でも、アムダマインズの保健研修に参加したことで、子どもはもちろん、母親である私自身の健康を守るために必要な正しい知識を学ぶことができました。妊娠中はきちんと産前健診を受け、助産師さんの指導や研修で学んだことを実践したので、出産まで安心して過ごすことができました。赤ちゃんが生まれてから6か月までは母乳のみを与え、7か月からは料理教室で学んだ離乳食も与え始めました。おかげで、わが子は健康で活発！私は本当に幸せです。

近所のお母さんたちから「なぜそんなに健康なの？」とよく聞かれます。そうした関心を持ってもらえることが、私にとって大きな喜びであり、誇りでもあります。

ネパール

面積：14.7万㎢（北海道の約1.8倍）
人口：2,969万人(2023年/世界銀行調べ)
公用語：ネパール語
1人あたりのGNI：1,430米ドル
(2023年/世界銀行調べ)
5歳未満児死亡率：27人
（出生1,000人あたり、2022年/WHO調べ）
妊産婦死亡率：142人
（出生10万人あたり、2023年/WHO調べ）

2026年の後発開発途上国卒業を目前に控えるネパールでは、経済成長とともに、国内に残る社会的・経済的格差の是正が喫緊の課題となっています。中でも、これまで開発の恩恵が十分に行き届かなかった山間部やへき地に暮らす人々、社会的に脆弱な立場にある女性や子ども、少数民族や低カースト層の人々に対する支援の必要性は、一層高まっています。誰一人取り残さない社会の実現に向け、地域や人々の状況に寄り添った、きめ細やかな活動が求められています。

へき地の女性にも安全な妊娠と出産の選択肢を
カイラリ郡チュレ地区

チュレ地区は、カイラリ郡で最も面積が大きく、標高1,000～1,400メートルの丘陵地に180以上の集落が点在しています。その為、病院や診療所までの距離が遠く、妊産婦健診や分娩介助などのサービスを受けるのが難しい人々の多い地域です。「女性は我慢するもの」という昔ながらの考え方が、女性の健康を守るうえで妨げになっていることもあり、妊娠・出産で命を落とす女性や子どもの割合は、ネパール国内の平均を大きく上回っていました。こうした状況

予防接種の際に子どものケアを説明

スタッフの声

アヌジャ・シャルマさん（総務・会計担当）

アムダマインズでの仕事は、私の人生にとってかけがえのない経験となっています。最初は「仕事」として始めたこの道ですが、今では、自分自身の成長や生きがいを感じられる、大切な居場所となりました。これまで、調整や報告業務、技術的な支援など、さまざまな役割に取り組む中で、専門的なスキルだけでなく、柔軟な考え方や人との信頼関係の大切さを学んできました。限られた資源や変化の激しい環境のなかで、工夫しながら日々の仕事に向き合うことは、私の価値観や人としてのあり方にも大きな影響を与えてくれています。なにより、自分の仕事が誰かの暮らしの改善につながっていると実感できることが、毎日の原動力です。ネパールでの活動を応援してくださっている皆さまに、心より感謝申し上げます。皆さまの温かなご支援と励ましが、私たちの大きな力になっています。

を踏まえ、同地区のすべての女性が安心して妊娠・出産できる環境づくりに取り組んでいます。

2024年度は、分娩に対応できる診療所を新たに建て、助産師の技術向上にも取り組みました。さらに、胎児の様子を確認できるポータブルエコー（超音波診断装置）を使った出張検診を実施し、すべての妊婦がエコー検診を受けられる体制を整えました。これにより、地域内での安全な出産はもちろん、ハイリスク妊婦を早期に発見し、地域外の総合病院へ搬送することが可能になりました。
また、妊婦の家族や、思春期の子どもたちへの啓発活動を通じて昔ながらの考えを払しょくし、女性を労わる意識が定着するよう努めています。この他、無料の婦人科検診キャンプを開催し、子宮脱などに悩む約500名の女性たちの健康を支えることができました。

この活動は、外務省「日本NGO連携無償資金協力」、公益財団法人森村豊明会、生活協同組合おかやまコープ「AMDA基金」、株式会社オカイ・メディカル・ファーマシー、そして多くの皆さまからのご支援に支えられています。

「私はプロの農家です」と誇れるその日まで
ゴルカ郡ガンダキ地区・サヒッドラカン地区

ネパールでは人口の6割以上が農業に携わっていますが、国内総生産（GDP）に占める割合は3割程度にとどまり、農業が国の産業として十分に発展していないのが現状です。特に丘陵地の村々では、仕事を求めて都市部や海外に出ていく人が後を絶ちません。活動地でも、6割以上の家庭が農業で生計を立てていますが、そのうち1年を通して農業だけで暮らしていけるのは2割程度。多くの家庭が家族の誰かを出稼ぎに送り出さざるを得ない状況です。「農業で食べていけるなら、家族と一緒に村で暮らしたい。」海外へ出稼ぎに出ようとする若者のひと言をきっかけに、このプロジェクトは始まりました。

コーヒーや野菜など換金作物の栽培と販売を主たる収入の手段として生計を立てられる農家、つまり「プロの農家」を増やすことは、彼らの生計向上だけでなく、地域全体の農業の活性化や、家族が一緒に暮らせる未来、そして持続可能な地域づくりにもつながっています。

2024年度は、約300回のミニセミナーを開き、土壌改良や施肥、病害虫対策など、野菜やコーヒーづくりに必要な技術を農家に指導しました。さらに、各集落で活動をけん引する役割を担うリーダーファーマーも54名誕生し、新しい技術を積極的に学び、地域に広めようと意気込んでいます。また、収穫したコーヒーチェリーを加工するための施設を3か所追加し、地域内10か所で精選加工から出荷までを共同で行った結果、地域全体で約100万円の売り上げにつながりました。この他、地元や首都で開かれたイベントにコーヒーブースを出展したり、農産物品評会で栽培した野菜が受賞したりするなど、「プロの農家」としての自信と誇りが育まれています。

この活動は、JICA草の根技術協力事業（パートナー型）として実施しています。また、かながわ湘南ロータリークラブをはじめ、多くの皆さまからのご支援に支えられています。

殺菌剤の塗布方法を農家に丁寧にアドバイス

コーヒー加工の技術を専門家が指導

受益者の声

クリシュナ・タパさん（ゴルカ郡サヒッドラカン地区 リーダーファーマー）

私は18年間、武装警察部隊に勤めました。退職後、生まれ育った村に戻り、農業で生計を立てていこうと決め、プロジェクトに参加しています。家の庭には、父が20年ほど前に植えたコーヒーの木が3本残っていましたが、スタッフが教えてくれるまで、その赤い実が売れるものだとは知りませんでした。プロジェクトの支援を受け、自分の畑に200本のコーヒーを植えました。スタッフの皆さんは、生育管理の方法や病害虫への対応など、とても丁寧に教えてくれるので心強いです。より良い収入を求めて海外へ出稼ぎに行った息子に、「コーヒー栽培で稼げるようにしておくから、しんどくなったらいつでも村に帰って来いよ」と言えるようになりたい。やっぱり、父や祖父が守ってきたこの土地、この村が、自分たちにとって、なによりの財産なのだと、農業を始めてから改めて実感しました。

ホンジュラス

面積：11.2万㎢（日本の約3分の1）
人口：1,064万人(2023年/世界銀行調べ)
公用語：スペイン語
1人あたりのGNI：2,890米ドル
(2023年/世界銀行調べ)
5歳未満児死亡率：16人
（出生1,000人あたり、2022年/WHO調べ）
妊産婦死亡率：47人
（出生10万人あたり、2023年/WHO調べ）

中米に位置するホンジュラスは、北はカリブ海、南は太平洋に面し、国土の約8割を山地が占める自然豊かな国です。一方で、中南米・カリブ諸国の中でも貧困率が高く、格差も大きい国の一つであり、解決すべき社会課題を多く抱えています。保健分野では、妊産婦や乳幼児の健康に加え、がんなどの非感染性疾患への対応も急務となっています。さらに、気候変動の影響による異常気象が、農業や生活環境に直接的な影響を及ぼしており、特に地方に住む農家の生活が脅かされています。

母子の継続ケアの強化を目指して
フランシスコ・モラサン県レイトカ市、クラレン市

レイトカ市とクラレン市では、妊産婦や乳児死亡率が高く、新生児期の栄養不良も深刻です。その背景には、山間村であるため保健医療サービスや情報へのアクセスが限られていることや、医療設備の不足、伝統的慣習など、様々な課題があります。こうした中で母子の命を守るためには、妊娠前から子どもの成長までを一貫して支える「継続ケア」が必要とされています。

2024年度は、保健医療施設に対し、超音波診断装置や分

日本人の専門家による新生児蘇生研修

スタッフの声

メルビン・アマドルさん（母子継続ケア強化事業 コーディネーター）

事業の様々な効果の中でも、クラレン市に初めて導入された超音波診断装置と、医師への研修によるインパクトは特に大きいと感じています。妊婦本人はもちろん、家族や保健ボランティアの関心もとても高く、2024年度にはクラレン市で144回の検査が実施され、胎児と母体の異常の早期発見につながりました。地元で超音波検査を受けられるようになったことが妊婦健診の受診を後押ししています。

私はレイトカ市出身で、「地元の保健医療問題を何とかしたい」という思いから看護師になりました。今、アムダマインズの事業を通じて問題解決に貢献できていることをうれしく思います。これからは効果の持続性に焦点を当て、将来、この事業がなくても母子保健改善のための活動が継続されるよう、住民、保健医療施設、市役所との連携を一層強化していきます。

娩台、血圧計、太陽光発電システムなど、母子継続ケアの強化に不可欠な医療機材を提供しました。また、日本の専門家（助産師）による研修を通じ、母子手帳が活用されるようになったほか、医療従事者の新生児蘇生の技術も向上しました。さらに、妊婦とその家族を対象とした両親学級や、学校・地域での啓発活動には、1,300人以上が参加し、地域全体で母子の健康への意識が高まりつつあります。

この活動は、外務省「日本NGO連携無償資金協力」、連合「愛のカンパ」中央助成、そして多くの皆さまからのご支援に支えられています。

地域の女性にがん検診の機会を

エル・パライソ県ダンリ市、テウパセンティ市、エル・パライソ市、トロヘス市

乳がん予防月間の啓発イベント

エル・パライソ県は、乳がん・子宮頸がんの罹患数が特に多い県の一つですが、検診の必要性が十分に理解されておらず、身近な保健医療施設で検診が受けられないという状況にありました。こうした課題を受け、県内4市の保健医療施設において、女性が乳がん・子宮頸がん検診を受けられるよう支援しています。

2024年度は、医療従事者を対象に、乳房の超音波（エコー）検査や酢酸による子宮頸部視診などの技術向上研修を実施するとともに、検診に必要な資機材や消耗品を保健医療施設に提供したことで、2,000人を超える女性が検診を受けることができました。また、検診の重要性を広く伝えるために、保健医療施設の待合スペースにがん検診の重要性を伝えるポスターを掲示したり、乳がん・子宮頸がんの予防月間に合わせた啓発イベントを開催したりするなど、様々な活動に取り組みました。

この活動は、第一三共株式会社との連携により実施しています。

環境保全と栄養改善のための家庭菜園と植林

エル・パライソ県グイノペ市、サン・ルカス市、サン・アントニオ・デ・フローレス市、オロポリ市

中米の乾燥地域に位置するエル・パライソ県南西部の4市では、焼き畑や農地の無計画な拡大により森林の伐採が進み、化学肥料などを用いた農業により土地も劣化していました。この状況を改善するため、環境にやさしい農法を用いた家庭菜園の推進と、地域の環境を保護するための植林を行いました。

2024年度は、4市88世帯の家庭菜園を支援し、ニンジン、ビーツ、カボチャなど平均25種類もの野菜や果物が栽培できるようになりました。また、収穫物を利用した調理教室を行い、家庭での食事に取り入れられるようになりました。さらに、8校の学校菜園で育てられた野菜が、400人を超える児童・生徒に給食として提供されました。また、地域の環境保全のために、1万2,000本を超える苗木を植樹するとともに、水源を守るための柵も設置しました。

この活動は、立正佼成会一食平和基金、公益社団法人国土緑化推進機構「緑の募金」、そして皆さまからのご支援により実施しました。

家庭菜園できゅうりを収穫した親子

受益者の声

リリアン・エリサベス・バレリオさん（乳がん・子宮頸がん検診受診者）

ある日、家の近くの保健医療施設で乳がんと子宮頸がんの検診が受けられることを知りました。それまで乳がん検診は一度も受けたことがなく、子宮頸がん検診を受けたのも十年以上前だったので、検診料が高くないなら受けてみようと思いました。「もし悪い結果が出たらどうしよう」とか「検査は痛くないのかな」と考えしまい、怖い気持ちもあったのですが、受診前に医師が、がんのことや検査内容について丁寧に説明してくれ、不安を和らげてくれました。検査の結果、何も異常はないことが分かり、とても安心しました。検診はとても大切です。病変を見つけ、症状の悪化やがんの進行を防ぎ、命を守るための手段です。この事業はたくさんの女性の助けになっています。遅すぎて、手遅れになってしまわないよう、周りにも受診することを勧めていきたいと思います。

マダガスカル

面積：58.7万㎢（日本の約1.6倍）
人口：3,119万人(2023年/世界銀行調べ)
公用語：マダガスカル語
　　フランス語
1人あたりのGNI：510米ドル
(2023年/世界銀行調べ)
5歳未満児死亡率：66人
（出生1,000人あたり、2022年/WHO調べ）
妊産婦死亡率：445人
（出生10万人あたり、2023年/WHO調べ）

アフリカ大陸の南東沖に位置するマダガスカルは、世界で４番目に大きいマダガスカル島を中心とする島国です。固有の動植物が多く、アフリカとアジアが融合した文化を持つ魅力あふれる国です。一方、農業の生産性が低く、経済構造も脆弱なため、国民の約8割が１日2.15ドル未満で暮らす極度の貧困状態にあります。さらに森林伐採に加え、近年の気候変動が農業生産に深刻な影響を及ぼしており、農作物の不作に伴う食料不足と収入減少が、人々の健康や生活の安定を大きく揺るがしています。

しっかり食べて健やかに成長できるように
アナラマンガ県アチモンジャン郡、マンザカンジーナ郡

アナラマンガ県は５歳未満児の発育阻害率が高い地域ですが、その中でもアチモンジャン郡のそれは県平均を上回っているにもかかわらず、十分な支援が届いていませんでした。発育阻害の減少には、栄養のみならず保健や水と衛生、生計など、多方面からのアプローチが必要ですが、各村に2人程度の保健普及員だけでは対応が難しい状況でした。そこでアムダマインズは、栄養改善に関する幅広い知識を身につけ、自ら実践に活かせる人材（トレーナー）を育成

研修に真剣に取り組む村のトレーナー

パートナーの声

ラミフェイアリヴ・ヤコブさん（水と衛生専門家）

私は水と衛生分野の専門家としてプロジェクトに参加しました。スタッフや関係者と様々な意見交換や議論を重ねながら、実施する活動を一緒に決め、計画を立てました。家庭用トイレの設置では、住民が主体的に取り組めるよう工夫し、水と衛生に関する研修も行いました。その結果、村でトイレが普及しただけでなく、安全な水を使い、衛生的な環境を保つために、自ら行動する人が増えてきたと感じています。

アムダマインズとの協働は非常に実りあるもので、プロジェクトは地域のニーズにしっかり応えた素晴らしいものでした。チームメンバーとは深い信頼関係が築かれ、お互いを支え合いながらすべての活動を円滑に実施することができました。皆さん大変献身的で、家族のような温かい雰囲気の中で働ける環境は、私に大きなやりがいとモチベーションを与えてくれました。

し、彼らを通じて地域住民に知識を伝え、改善に向けて取り組む活動を推進してきました。

2024年度は3年間の取り組みを締めくくる最終年となりました。活動を推進する村のトレーナーと住民がこれまで学んできた栄養や保健、農業、生計向上などの知識を定着させるための研修を行いました。また、500を超える世帯にトイレを設置し、衛生環境を改善し、1,000世帯に家庭菜園用の道具や野菜の種を配布することで、食事の量と種類の多様化に取り組みました。

さらに、たんぱく質摂取の増加につなげるため、ワクチン接種済みの鶏５羽、給餌器、給水器、1か月分相当の餌を250世帯に配布し、その後の飼育状況の確認とアドバイスを実施しました。事業終了時には、これまで活動を引っ張ってきた地域のコーディネーターやトレーナー、事業関係者、行政担当者らが成果発表会に参加し、3年間の取り組みを振り返るとともに、今後も自分たちで継続していくという意気込みを確認することができました。

アムダマインズはこの取り組みの経験から、農民が生業から農作物を十分に収穫できれば、栄養改善も生活改善もより大きな効果が期待できることを認識し、2025年3月にはマンザカンジーナ郡で、野菜の収穫量増加を目指す新たな活動を開始しました。

この活動は、外務省「日本NGO連携無償資金協力」、公益信託アフリカ支援基金、かながわ湘南ロータリークラブ、そして多くの皆さまからのご支援に支えられています。

学校で安全に、安心して健やかに学べるように
アナラマンガ県アチモンジャン郡、マンザカンジーナ郡

マダガスカルには、首都近郊であっても教室の屋根や床、壁が壊れていたり、安全な水やトイレがない学校が多くあります。こうした環境は児童の安全を脅かすだけでなく、雨漏りで授業に集中できないなど、学習の妨げにもなっています。また、野外での排泄が常態化し、手を洗うこともできないため、子どもたちは下痢などの病気にかかりやすく、そのために学校を休むことも少なくありません。特に女子児童にとっては、トイレの欠如が月経中の不登校の誘因となっており、マダガスカル教育省は、1年間に350万日もの大切な学校生活が失われているとしています。

このような状況に対し、2024年度は4校の小学校で教育環境の整備に取り組みました。うち1校では、教室の基礎工事と補修、壁や漆喰の全面改修、塗装、トタン屋根の葺き替えを行い、安心して学べる空間を整備しました。その他の３校では、状況に応じて男女別トイレ4基（男子用1＋女子用3）と男子用の小便用トイレ1基を新設または修理しました。この他、教職員60名に対して衛生研修を実施し、児童、保護者、地域住民に向けた啓発イベントも各校で開催。自分自身で衛生的な環境を保つ意識と行動の重要性を伝えました。

この活動は、フェリシモ地球村の基金からの助成および皆様からのご支援に支えられています。

新しいトイレに安心と喜びを感じている女性

人形劇を通して衛生の大切さを学ぶ児童

受益者の声

フィナリチャさん（アンババアディトゥカナ・コミューン 養鶏参加者）

私は農業をしている両親とパン屋を営む夫、1歳4か月の子どもと暮らし、普段は両親の農作業を手伝っています。養鶏の経験はありましたが、きちんと学んだことがなく、知識不足のため多くの鶏を病気で失っていました。昔ながらのやり方で2、3羽を放し飼いにしているだけだったので、安定した収入源とはいえませんでした。

活動に参加して半年ほどが経ちますが、今では生後４か月の鶏が11羽、1か月の鶏が4羽、そして9個の卵が孵化中です。餌の配合、鶏小屋の日当たりや換気にも気を付けるようになりました。鶏の健康管理だけでなく、肥育記録や作業計画も漏れなく記録しています。研修で学んだことを実際にやってみたことで鶏は順調に育ち、増えてきています。近い将来、地元のマーケットだけでなく、レストランにも鶏を提供できるようになりたいと思っています。

ザンビア

面積：75.3万㎢（日本の約2倍）
人口：2,072万人(2023年/世界銀行調べ)
公用語：英語
1人あたりのGNI：1,290米ドル
(2023年/世界銀行調べ)
5歳未満児死亡率：56人
（出生1,000人あたり、2022年/WHO調べ）
妊産婦死亡率：85人
（出生10万人あたり、2023年/WHO調べ）

1964年の独立以来、内戦や紛争を経験していないザンビアは、アフリカでもっとも平和な国の一つとされています。近年は5%を超える経済成長を遂げている一方で、国民の約6割が1日2.15ドル未満で生活する極度の貧困状態にあります。首都でも安定した仕事に就けない人々や、整備されていない住環境で暮らさざるを得ない人々も多く、生活の格差が拡大しています。加えて、近年は雨季に十分な雨が降らず、農業生産の減少や電力不足など、日々の暮らしにさまざまな困難がもたらされています。

ハートサポートプロジェクト
首都ルサカ

ジョージ地区を中心とする地域の若者に、リプロダクティブヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康と権利）について伝えるとともに、月経衛生の促進と再利用可能な布ナプキンの普及に取り組みました。2024年度は3,244枚の布ナプキンを作製して寄贈・配布した他、地域や学校で保健教育を行いました。また、この事業がきっかけで結成された青年グループ（Star of George Youth Club, SGYC）には、活動を自立的に継続するための知識や技術を学ぶ研修機会を提供しました。

この活動は、大王製紙株式会社との連携により実施しました。

すべてはジョージコミュニティのために
首都ルサカ

ジョージ地区にあるコミュニティセンターは、同地区の保健センターを通じて貧困層の住民を支援するための活動を行っており、アムダマインズはその運営に協力しています。

2024年度当初は運営が一時停滞したものの、定期的に声がけが行なわれたところ、コミュニティセンターで働いているスタッフがセンターの存在意義を再認識し、野菜栽培等の取り組みを粘り強く継続してくれました。収穫された野菜は保健センターへ寄贈され、栄養病棟に入院中の母子の病院食として活用されています。

受益者の声

Star of George Youth Clubのメンバーたち

私たちは2024年7月からユースグループに参加し、生理用布ナプキンの作製と配布、保健教育を通じて、コミュニティの女の子が生理に左右されずに毎日を過ごすことができるよう支援しています。布ナプキンを渡すときに、彼女たちが満面の笑みで喜んでくれて、衛生的に生理をコントロールする方法について積極的に質問してくれることが本当にうれしいです。また、裁縫研修の機会を提供いただいたお陰で、より質の高い布ナプキンを作製するための知識と技術を習得することが出来ました。

今、ザンビアの物価はどんどん上がっており、生活は本当に苦しくなっています。私たちの布ナプキンで経済的に恵まれない女の子が笑顔になれるよう、これからも支援していきたいです。

シエラレオネ

面積：7.2万㎢（日本の約5分の1）
人口：846万人(2023年/世界銀行調べ)
公用語：英語
1人あたりのGNI：870米ドル
(2023年/世界銀行調べ)
5歳未満児死亡率：101人
（出生1,000人あたり、2022年/WHO調べ）
妊産婦死亡率：354人
（出生10万人あたり、2023年/WHO調べ）

西アフリカの大西洋沿岸に位置するシエラレオネは、鉱物や海産物など、豊かな資源を有する国ですが、1991年から11年間続いた内戦が、国の社会基盤に甚大な被害をもたらしました。近年では、エボラ出血熱や新型コロナウイルスの流行により、保健医療体制はさらに深刻な打撃を受けています。現在、同国の保健指標は世界で最も低い水準の一つにとどまっており、国全体で保健人材や医療資源が不足する中、特に子どもの命を守る医療の整備が急務となっています。

国内唯一の小児専門病院を支える
首都フリータウン

シエラレオネは、世界でも特に子どもの死亡率が高い国の一つですが、小児医療を専門とする病院は、首都にある「オラデュリン小児専門病院」ただ一つしかありません。にもかかわらず、世界的な情勢不安や歳入減少などの影響により、病院運営は非常に厳しい状況にあります。

この事業では、病院が必要とする医薬品や検査試薬、医療機器の修繕、救急車の燃料など、日々の診療に欠かせない支援を届けています。2024年度には、約3,500人分の小児患者に必要な医療物資を提供した他、約130人の患者を緊急搬送することができました。

この活動は、皆さまからのご支援に支えられています。

救急患者の無事の搬送に安堵の看護師

パートナーの声

アブ・バカール・バー医師（オラデュリン小児病院 院長）

病院を代表し、日本の皆さまからのご支援に心より感謝申し上げます。ご支援いただいている医療物資は、子どもたちにより良い医療を届けるための大きな力となっています。物資が充実したことで、治療の効果やスピードが向上し、増え続ける医療ニーズにも柔軟に対応できるようになりました。

シエラレオネの子どもたちの健康を願い、真摯に応援してくださる日本の皆さまに、深い敬意を抱いております。皆さまとのパートナーシップは、病院の機能向上に留まらず、医療に携わる私たちの励みにもなっています。また、日本とシエラレオネをつなぐ架け橋として尽力されてきたアムダマインズの皆さまにも、心より感謝申し上げます。

今後も未来を担う子どもたちの命を守り、希望ある社会をともにつくっていけることを願っています。

国際理解教育を通じた地域社会への貢献

知ることから始まる、国際教育への一歩

アムダマインズは、国際協力の現場で培った経験をもとに、さまざまな分野で活動するスタッフが、講演やワークショップ、イベントへの登壇など、多種多様なご依頼にお応えしています。また、自治体や企業との連携を通じて、SDGsの実現を目指す取り組みも広がっています。2024年度の事例をご紹介します。

高校生が学ぶ国際理解と奉仕の心
第47回岡山県インターアクト指導者講習会

第47回岡山県インターアクト指導者講習会

インターアクトは、国際ロータリーが行っている高校生向けのプログラムで、地域や世界に貢献できるリーダーを育てることを目的としています。岡山県内にも、インターアクトクラブをもつ高校が複数あり、生徒たちは奉仕活動や国際理解をテーマに積極的に学んでいます。

2024年11月24日には、岡山県立水島工業高等学校で「第47回岡山県インターアクト指導者講習会」が開かれました。今回はアムダマインズのスタッフが講師として参加し、「世界の貧困」や「教育を受けられない子どもたちの現状」について、講演とワークショップを行いました。

自分たちにできることを真剣に考える高校生の姿からは、国際理解や奉仕の心が着実に育まれていることが感じられました。

自治体・企業・NGO連携でSDGs12「つくる責任 つかう責任」に貢献
くらしき環境フェア2024 不要品チャリティーオークション

くらしき環境フェア2024

環境について考えるきっかけを提供する「くらしき環境フェア2024」において、「不要品チャリティーオークション」が開催され、その収益金をアムダマインズへご寄付いただきました。

このオークションは、主催の倉敷市（一般廃棄物対策課）と、環境関連事業を手がける株式会社ウイルパワーによる官民連携の取り組みで、オークション初心者の方でも安心して出品できる仕組みが整えられていました。

「不要になったけれど、まだ使える」「捨てるにはもったいない」といった品々が多数出品され、来場者の関心を集めました。環境保全への貢献だけでなく、国際協力にもつながるチャリティーとして、多くの方から温かいご賛同と喜びの声が寄せられました。

イベントオリジナルの寄付つき商品がネパール農家の力に
おかやま珈琲時間

オリジナルブレンドコーヒー

2024年11月30日・12月1日の2日間、岡山城で開催された大型イベント「おかやま珈琲時間」（株式会社ビザビ創業90周年記念）では、イベント限定の「オリジナルブレンドコーヒー」が販売されました。収益の一部がアムダマインズを通じてネパールのコーヒー農家の支援につながる特別なコーヒーで、楽しみながら国際協力に参加できる商品として、多くの方々にご好評をいただきました。イベント会場の岡山城だけでなく、県内各地のPOP UPストアでも取り扱われ、多くの方の手に取っていただくことで、コーヒーを通じて、遠く離れたネパールの農家とつながる新しい支援の形を提案する機会となりました（現在は販売終了、写真提供：株式会社ビザビ）。

講演・イベント

岡山県立岡山芳泉高等学校「土曜オープン講座」

相模原橋本ロータリークラブ「設立10周年記念式典」/ Centre for Social Change「Redefining Civil Society Roles in Nepal's Evolving Socio-Political Landscape」/ 広島西ロータリークラブ・国連ユニタール協会「経験者から学ぶ国際社会奉仕」/ 岡山市立岡南小学校「世界の多様性と格差からSDGsを学ぼう」/ かながわ湘南ロータリークラブ例会「マダガスカル事業について」 / 神戸学院大学「社会防災特別講義Ⅳ」/ 第一三共株式会社「ボラMaru放送局報告会」/ 日本福祉大学「マダガスカルオンラインスタディツアー」/ JICA中国「西粟倉村フィールドワーク」/ 一般社団法人blue earth green trees「第29回種を蒔く人のお話を聴く会」/ グローバルフェスタJAPAN2024 ブース出展 / 生活協同組合おかやまコープ「エリア学習会」(備北エリア、倉敷エリア、岡山西エリア) / くらしき環境フェア2024「不要品チャリティーオークション」/ コープ鴨方店「アムダマルシェ」/ 平和を作り出すキリストと市民の集い「職業としての国際協力」/ 岡山県立岡山芳泉高等学校「土曜オープン講座」/ HAPIC2024「NGO×グループコーチング」/ 岡山市立千種小学校「世界の多様性と格差からSDGsを学ぼう」/ 順天高等学校「ザンビアオンライン交流」/ 相模原橋本ロータリークラブ 例会 / 第47回岡山県インターアクト指導者講習会プログラム「世界の貧困と学ぶことができない子どもたち」/ 国際フェスタ2024「森崎ウィンさんトークショー」/ 島根県立浜田養護学校高等部「探求学習」/ 岡山城ロータリークラブ 卓話 / 吉備国際大学留学生別科「国際貢献とSDGs」/ 岡山丸の内ロータリークラブ 国際奉仕クラブフォーラム（実施順・敬称略）

NGO相談員出張サービス

アムダマインズは外務省から「令和6年度NGO相談員」の委嘱を受け、国際理解促進を目的とした以下のイベントや講演等にNGO相談員がお伺いする出張サービスを提供しました。

- グローバルフェスタJAPAN 2024「外務省NGO相談員に聞いてみよう!」
- 広島修道大学「アムダマインズの活動について」
- 第一学院高等学校岡山キャンパス「メイプルフェス」
- 松江市立皆美が丘女子高等学校「女性の人権」
- 株式会社ココピア「相続と遺品整理に関するセミナー」
- おかやま旭川行政書士事務所「相続・終活セミナー」

（実施順・敬称略）

第一学院高等学校岡山キャンパス「メイプルフェス」

メッセージ

「対話からはじまる国際協力」吉備国際大学 留学生別科 主任 畑 裕子さま

本学には主に東南アジアからの留学生が多く在籍しております。既に国際人としての一歩を踏み出している留学生が、海外にいるからこそ改めて自国の問題点を見つめ直し、それを他国の仲間と共有する。お互いの問題点を知ることで、また新たな気づきを得て真の国際人として成長していく。机上での学びも大事ですが、活動や交流、対話などからしか得られない学びもあります。そういう場を提供できないかとご相談にあがり、講義が実現しました。講義をご担当くださった熊代智恵さんは最後に「知らなかったことを知ること。そして考えることが、国際協力の始まりです。」と締めくくってくださいましたが、今回の講義の狙いは正にそこにあるのだと共感いたしました。今の自分そして未来の自分がどうありたいかをほんの少しでも考える機会が持てたら…今後、より有意義な留学生活を送ることができるのではないかと期待しております。

留学生の皆さんと（中央：筆者）

団体・企業との連携

アムダマインズの活動は、志を同じくする多くの市民や企業、団体の皆さまとのパートナーシップによって支えられています。世界で起きているさまざまな課題に、一緒に取り組んで下さる皆さまに、心から感謝いたします。ここでは、そうした連携の一端をご紹介します。

パートナーシップで医療基盤の強化に取り組む
第一三共株式会社

AMDA-MINDSとは、2021年から2023年に実施されたネパールでのプロジェクトに続き、ホンジュラスにおける「乳がん・子宮頸がん検診促進による予防啓発プロジェクト」において協働させていただいています。2025年3月には現地を視察する機会を得ることができました。この訪問を通じて、AMDA-MINDSと関係者との長年にわたる深い信頼関係を実感しました。
日本では想像しがたい医療アクセスの限られた地域において、住民のために活動されている医師や保健ボランティアの方々の熱意に触れ、この取り組みが地域住民の生活と健康に大きな影響を与えていることを実感しました。非常に貴重な経験でした。
この体験を通して、私たち一人ひとりが健康であることの重要性を再認識し、医療へのアクセスが限られた地域の人々への支援がいかに重要であるかを強く感じました。AMDA-MINDSの取り組みが、今後も多くの人々の健康と幸福に寄与することを心より願っています。また、今後のプロジェクトにおいてさらなる成果と発展があることを期待しております。

（サステナビリティ部 グローバルヘルス・社会貢献グループ 田村晃子さん）

養鶏支援で子どもの栄養改善
かながわ湘南ロータリークラブ

かながわ湘南ロータリークラブは、これまでもAMDA社会開発機構を通じて、ミャンマー、ザンビア、ネパールなどで奉仕活動を実施してきましたが、20周年にあたる今年度は、発育阻害児の多いマダガスカルで、子どもの栄養状態を養鶏で改善するプロジェクトを実施しました。3歳以下の子どもがいる100軒の家庭を対象に、養鶏の技術指導を行った後、鳥小屋を各自で用意してもらい、雌4羽雄1羽に給餌器などを支給するもので、雛も多数かえり着実に成果が上がっています。10月には会員４名及び関係者２名の合計６名が現地に7軒のお宅を訪問、正月明けにはクラブからのカードも届けてもらいました。きめ細かいフォロー、会計報告、写真による経過報告も完璧で、「世界でよいことをする」ロータリーの目的達成のため、「国際奉仕はアムダマインズさんを通じて」が、当クラブの合言葉です。

（2024-25年度クラブ会長　髙木直之さん）

NOレジ袋＆NOわりばしで10円寄付
土佐キムチ

すべてのイノチに優しい世界を!と心に決めたころに出会ったのがアムダマインズ。岡山県総社市/高杉こどもクリニックを通じてのご縁でした。私ども土佐キムチでの取り組みは「NOレジ袋＆NOわりばしで10円寄付」。お客様が「袋/わりばし不要」とおっしゃったらその売上げから募金箱へ10円を入れます。お客様へのキャッシュバックではなく募金箱へ意気揚々と入れるのです。自分の行動が国際協力に繋がることを目の当たりにするお客様。アムダマインズのお話しをお伝えすると「みんなが嬉しくなるがやね!」と常連さんからは継続的なご協力をいただけるようになりました。各所へ出向いて販売するうえで課題のひとつとなるゴミ削減にも繋がり、まさに三方良し!小さい商売の小さい支援ではありますが身の丈に合う取り組みでお役に立てれば幸いです。一度きりで終わらない・自分だけで終わらない小さな支援の広がりを。土佐高知より。

2024年度にご支援をいただいた企業・団体の皆様をご紹介します。

団体会員

いちよし証券株式会社

株式会社イノウエ

蔭涼寺

キウイフルーツ
カントリーJAPAN

相模原橋本
ロータリークラブ

正田醤油株式会社

有限会社
高原企業保険事務所

中外製薬株式会社

有限会社
ニッティ・グリッティ

平林金属株式会社

株式会社富士メガネ

一般社団法人
blue earth green trees

松野建設株式会社

ムネ製薬株式会社

学校法人森教育学園
岡山学芸館高等学校

支援企業

一般社団法人アースチルドレン / azbilみつばち倶楽部 / 株式会社アマックスコーポレーション / 株式会社安藤忠雄建築研究所 / 有限会社ウイルパワー / 生活協同組合おかやまコープ / かながわ湘南ロータリークラブ / 倉敷市立多津美中学校 / 株式会社GLOCAL / 株式会社ココピア / Sunny Day Coffee / 株式会社三美産業 / JFサポート株式会社 / 島根県立浜田養護学校 / 順天中学校・高等学校 / 順天中学校・高等学校 飛鳥会 / 株式会社STYZ / 社会福祉法人聖泉福祉会さふらん保育園 / 第一学院高等学校岡山キャンパス / 第一三共株式会社 / 大王製紙株式会社 / 合同会社ダフェプロジェクト / つなぐ書店 / TMコミュニケーションサービス株式会社 / ニコニコキッチンさんさん / ネパールボランティアグループ空 / 税理士法人ハガックス / 葉豆瑠農園株式会社 / 株式会社原書房 / LINEヤフー株式会社

助成団体/パートナー団体

公益信託アフリカ支援基金 / 外務省 / 公益社団法人国土緑化推進機構「緑の募金」/ 独立行政法人国際協力機構（JICA）/ 公益財団法人テルモ生命科学振興財団 / 株式会社フェリシモ「地球村の基金」/ 公益財団法人森村豊明会 / 立正佼成会一食平和基金 / 連合・愛のカンパ中央助成

募金箱設置協力パートナー

インドダイニングカフェマター下中野店 / 株式会社オカイ・メディカル・ファーマシー / 隠れ家食堂一歩 / キウイフルーツカントリーJAPAN /株式会社GLOCAL / cozy / 讃岐の男うどん / サンマルクカフェ岡山空港店 / 下山珈琲 / 出西コミュニティセンター / 荘原コミュニティセンター / 医療法人髙杉会 高杉こどもクリニック / 土佐キムチ / はまゆう / ブラッスリー プティ モンタニュ / 焼肉桃苑 / ゆとり空間 理容にしの / 和酒Bar岩月 / one day

（五十音順・敬称略）

事業一覧

ミャンマー	事業期間	主なドナー
メティラ郡における生計向上事業	1998年6月～現在	国際ロータリー第2780地区、外務省、他
シャン州北部地域マイエー地区の山岳地帯における 母子保健改善事業	2022年3月～2026年2月	外務省
ネパール	**事業期間**	**主なドナー**
母子健康格差是正事業	2021年4月～現在	生活協同組合おかやまコープ
ネパール極西部へき地集落における安全な妊娠・ 出産促進事業	2023年3月～2026年4月	外務省
ネパールへき地集落における婦人科検診キャンプ	2023年4月～2026年4月	公益財団法人森村豊明会 公益財団法人テルモ生命科学振興財団
青年リーダーたちと取り組む「稼ぐための農業」 推進プロジェクト	2024年3月～2027年2月	JICA かながわ湘南ロータリークラブ
ホンジュラス	**事業期間**	**主なドナー**
乳がん・子宮頸がん検診促進による予防啓発プロジェクト	2022年12月～2026年5月	第一三共株式会社
ホンジュラス国保健サービスネットワーク（RISS）を通じた 保健サービスデリバリー強化プロジェクト（第二期）	2023年1月～2026年10月	JICA
家庭菜園を通じた栄養改善プロジェクト	2023年7月～2024年6月	立正佼成会一食平和基金
水源保全とアグロフォレストリー推進事業	2023年7月～2024年6月	公益社団法人国土緑化推進機構「緑の募金」
レイトカ市及びクラレン市における母子継続ケア強化事業	2024年3月～2027年2月	外務省
地域保健センターの機能強化を通じた、 母子保健医療サービス向上プロジェクト	2024年10月～2025年3月	連合・愛のカンパ中央助成
マダガスカル	**事業期間**	**主なドナー**
アチモンジャン郡における5歳未満児の栄養改善支援事業	2022年3月～2025年3月	外務省
養鶏支援を通じた栄養改善事業	2024年2月～2025年2月	公益信託アフリカ支援基金 かながわ湘南ロータリークラブ
清潔なトイレで、健康に学校生活を送ろう！プロジェクト	2025年1月～2025年12月	フェリシモ地球村の基金
マンザカンジーナ郡における野菜の収穫量増加支援事業	2025年3月～2028年3月	外務省
ザンビア	**事業期間**	**主なドナー**
ハートサポートプロジェクト	2021年2月～2025年3月	大王製紙株式会社
シエラレオネ	**事業期間**	**主なドナー**
小児病院支援	2023年1月～現在	寄付
スタッフ派遣	**事業期間**	
国民皆保険(UHI)政策実施能力強化プロジェクト（エジプト）	2021年11月～2025年3月	JICA技術協力事業
官民協力による農産物流通システム改善プロジェクト フェーズ2（インドネシア）	2021年6月～2025年6月	JICA技術協力事業
技能実習生の帰国後就農・起業支援を通じた人材還流促進 プロジェクト（インドネシア）	2022年10月～2026年10月	JICA草の根技術協力事業

役員構成 スタッフ数

理事長	鈴木 俊介	邦人スタッフ	17名
理事	飯塚 敏晃　増島 勇次	現地スタッフ	52名
監事	関田 冨美雄		

2025 年 3 月 31 日時点

メディア掲載

世界の貧困地域の支援活動に協力　おかやまコープが支援金　瀬戸内海放送（2024年5月9日）
小さな成功積み重ねたい（マダガスカル）　山陽新聞（2024年5月20日）
提言2024 地方からの「民際」協力　山陽新聞（2024年6月9日）
おかやまコープ 40年間続く"国際協力支援" への取り組み｜ 50th 集まれ!おかやまコープひろば 山陽放送（2024年10月3日）
留学生 母国の課題考える　山陽新聞（2025年1月11日）
中米の妊産婦 支援資金募る　山陽新聞（2025年2月11日）

会計報告

貸借対照表

2025 年 3 月 31 日 現在（単位：円）（税抜）

資　産　の　部		負　債　・　正　味　財　産　の　部	
【流動資産】		流動負債】	
現金・預金	139,365,159	未　払　金	26,140,994
未収金	5,394,526	前　受　金	200,877,876
未収消費税	7,000,000	短期借入金	30,000,000
海外流動資産	150,173,562	預　り　金	883,300
		仮　受　金	50,920
		未払法人税等	71,000
		未払消費税等	404,400
流動資産合計	301,933,247	流動負債 計	258,428,490
		負債合計	258,428,490
固定資産】		正味財産】	
什器備品	59,085	前期繰越正味財産額	37,130,245
敷金	297,000	当期正味財産増減額	6,730,597
固定資産合計	356,085	正味財産　計	43,860,842
		正味財産合計	43,860,842
資産合計	302,289,332	負債及び正味財産合計	302,289,332

活動計算書

2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日まで　（単位：円）（税抜）

【経常収益】		
受取会費	1,996,000	
受取寄附金	50,283,507	
受取民間助成金	5,419,684	
受取補助金（国内契約）	62,974,356	
受取補助金（海外契約）	107,011,332	
講演・出版等事業収益	881,666	
業務受託収入	93,707,004	
受取利息収入	531,864	
雑収入	4,600	
ミャンマー国生計向上プログラム収入	74,632,801	
為替差益	3,580,392	
経常収益計		401,023,206
【経常費用】		
【事業費】		
人件費	72,845,563	
その他経費	308,438,677	
事業費計		381,284,240
【管理費】		
人件費	9,276,000	
その他経費	3,661,369	
管理費計		12,937,369
経常費用計		394,221,609
当期経常増減額		6,801,597
税引前当期正味財産増減額		6,801,597
法人税、住民税及び事業税		71,000
当期正味財産増減額		6,730,597
前期繰越正味財産額		37,130,245
次期繰越正味財産額		43,860,842

世界の元気を育てたい。

AMDA MINDS

アムダマインズ　検索

特定非営利活動法人AMDA社会開発機構（アムダマインズ）は、人づくり村づくりを通じ、世界の貧困地域において暮らしの改善に取り組んでいる認定NPO法人です。

アジア・アフリカ・中南米において、保健、農業、教育、生計向上などSDGs達成に向けた社会開発プロジェクトに携わっています。また、日本国内では国際理解教育や企業連携を通じた社会教育を推進しています。

ミッション	人々とともに、開発途上国の貧困の軽減と健康の促進を目指す
ビジョン	今日の平和な生活が保障され、明日への希望が抱ける社会の実現
団体スローガン	世界の元気を育てたい。

団体名　特定非営利活動法人 AMDA社会開発機構
住　所　〒700-0818 岡山市北区蕃山町4-5 岡山繊維会館3階
T E L　086-232-8815
F A X　086-232-7668
E-mail　contact@amda-minds.org
W E B　https://www.amda-minds.org/